説教「自由と解放へ」

（イザヤ書 55 章 1 節-11 節 ルカによる音書 4 章 14-21 節）

2022 年 12 月 4 日

日本基督教団仙川教会主日礼拝
大串肇牧師

イエスは“霊”の力に満ちてガリラヤに帰られた。その評判が周りの地方一帯に広まった。イエスは諸会堂で教え、皆から尊敬を受けられた。

（14-15 節）

イエスは荒れ野でサタンの誘惑を受けられた後、「ガリラヤ」に帰って来られました。そこはナザレという町でした。ご承知のようにこの地はイエスの育った地であり、故郷です。幼少のイエスは「神からも人からも愛されて」成長されたと言われています。イエスは悪魔の誘惑に勝利し、ガリラヤに帰ってきました。ある意味で輝かしいスタートであったはずです。ところが…そうではありませんした。

「会堂」とは当時ユダヤ教の会堂のことです。そこでイエスは福音を語り、人々に教えられていました。イエスはその時「**霊”の力に満ちて**」いたと言われています。イエスの活躍の背後には神の目には見えざる御力が働いていました。大勢の人々の心を打ち、評判になり、多くの人々から尊敬を受けました。そういう素晴らしい成果が与えられたのです。

ところで「教える」という言葉は度々ルカ福音書やその続編である使徒言行録に頻繁に出てまいります。この言葉を今風に言えば、伝道とも言えますし、説教していた、会堂で礼拝していたと大まかに表現できるでしょう。イエスの姿はまさしく後の初代キリスト教会が同じように礼拝をおこなって、福音を伝道していた姿と重なっています。

当時のユダヤ教の礼拝では聖書朗読はもっとも大切なことでした。聖書に記された言葉こそ、神のご意思だったからです。イエスはその大事な役目を任されました。そのときにお読みになられた箇所が旧約聖書のイザヤ書の言葉でありました。18-19 節です。

主の霊がわたしの上におられる。貧しい人に福音を告げ知らせるために、／主がわたしに油を注がれたからである。主がわたしを遣わされたのは、／捕らわれている人に解放を、／目の見えない人に視力の回

復を告げ、／圧迫されている人を自由にし、主の恵みの年を告げるためである。」

この預言はとても重要な意味があります。油注がれるとは、王であるとか大祭司あるいは預言者が任職されるときになされた行為でした。イザヤ書の場合には「わたし」とは新たに任命される預言者自身を指し示しています。しかし、その預言者がなすことは預言者個人ではとても不可能なことばかりです。貧しい人たちに福音を告げることばかりか、捕らわれている人々を解放し、目に見えない人々の視力を回復させ、圧迫されている人々に自由をもたらすことは預言者どころか、ふつうの人間には到底できません。

預言者ならぬ預言者以上の人物、すなわち「油注がれた者」＝メシアであり、「わたし」こと、イエスご自身がそのメシアであると宣言なさっているのです。21 節、イエスは最後に「**この聖書の言葉は、今日、あなたがたが耳にしたとき、実現した**」と話されました。もはや待望の時代は過ぎ去りました。今こそ、「主の恵みの年」であり、救済の時代が到来したとイエスは宣言したのです。これはいわばメシア自身による「メシア宣言」です。衝撃的なメッセージでした。

貧しい人々に福音が語られ、病人や不自由を強いられている人々が解放されるとは、本来であれば喜ばしい、素晴らしいことではないでしょうか。ところが皮肉にも、もっともイエスに近いはずの故郷ナザレの人々が躓いたのです。彼らは自分達ユダヤ人たちこそ神の恵みを受けるにふさわしいと思っていました。ですから、イエスの言葉に反発したのです。「この人はヨセフの子ではないか」（22 節）という不満の声が起こりました。これは、まさにあのサタンが発したような闇の声です。ここからイエスの苦難と十字架の道が始まったのです。

仮にナザレ出身のイエスが偉大な預言者ならば神の恵みの御業をなすべき唯一の場は故郷ナザレのはずであり、カファルナウムのようなガリラヤの諸都市まで救いが及ぶのは考えられませんでした。しかも救われるのは「貧しい人たち」「捕らわれている人」「目の見えない人」、「圧迫されている人」だけです。ユダヤ人の慣習や常識で言えば、このような不幸な人々は不信仰だから神の罰を受け、様々な困窮や困難が与えられたのだと理解されていたからです。ましてやここにはユダヤ人も、異邦人と彼らが呼んで差別していた外国人も区別はありません。そのような異邦人や罪人たちが「主の恵みの年」を迎えるのは不当ではないか。主の恵みを受けるのは、本来は自分たちであり、神の選ばれた人だけではないか、こういう不満や異議が沸き上がったのです。

こうして「**会堂内の人々は皆憤慨し、総立ちになって、イエスを町の外へ追**

い出し、町が建っている山の崖まで連れて行き、突き落とそうとした。しかし、イエスは人々の間を通り抜けて立ち去られた」(28-30 節参照)。

これがガリラヤ伝道開始、愛すべき故郷ナザレでの伝道物語の顛末でした。イエスとサタンや悪魔との戦いは言ってみれば荒れ野で終わってはいなかったのです。

他方、わたしたちはこのユダヤ人やナザレの人たちを非難したり、批判したりすることができるでしょうか。主の恵みの年を迎えるのは自分であって、他者のはずがない。こういう自分勝手な思いによって神に対するつぶやき、不満、他者への嫉妬や怒りになってしまう。これがわたしたちの現実であり、身勝手な生の姿ではないでしょうか。

しかしながら主イエス・キリストはそのような罪深いわたしたちを赦すためにこの地上に遣わされました。経済的な貧しさ、政治的社会的な圧迫や身体的な困難からの解放と自由だけでなく、わたしたちの心の中を支配する罪と悪そして滅びから解き放ち、ほんとうの自由を与えることができるのは、王でも大祭司でも預言者でもなく、御子イエスただお一人だけなのです。

神はその愛する独り子を十字架につけ、わたしたちの身代わりとなしてくださいました。それが神の愛です。このイエス・キリストの十字架による愛と赦しの福音を心から受け入れるならば、誰もが罪と悪から解放され、本当の自由を与えられます。これがキリストの福音です。

どんな困難や試練の時でさえも、わたしたちを受け入れてくださる方がいらっしゃる。この人は「ヨセフの子ではないか」、というサタンや反キリストの声ではなく、このキリストの愛と赦しに満ちた福音に心の耳を傾けるならば今こそ、否、今だからこそ「主の恵みの年」となるのです。遅くはありません。罪からの解放と自由が与えられ、あなたの人生は嘆きから喜びへ、憎しみから和解や連帯へ変えられる。これが信仰によって生きる道です。イエスを心から迎え入れましょう。これがまさにアドヴェント（待降節）にわたしたちの捧げるべき祈りではないでしょうか。ご一緒にお祈りいたしましょう。